

西崎伸子 著

抵抗と協働の野生動物保護

—アフリカのワイルドライフ・マネージメントの現場から—



昭和堂

2009年 240ページ

4200円+税

本書は、著者が長年フィールドワークをおこなってきたエチオピアのセンケレ・スウェインハーテペースト・サンクチュアリ(以下、センケレ・サンクチュアリ)とマゴ国立公園を舞台に、複雑な「野生動物を介した人と人の関係のあり方」を野生動物保護政策に反映させる道を探求することを目的としている。本書は、著者がセンケレ・サンクチュアリにおいて青年海外協力隊員として勤務していたときに抱いた大きな疑問を出発点にしている。それは次の2点にまとめることができる。(1)アフリカにおける野生動物保護問題が地球環境保全という理念志向的な考えでとらえられている一方で、地域住民の生活の存続という現場の感覚が等閑視されている状況があること。(2)経済的利益の公平な分配によって問題が解決されるという神話が広く信じられていること。本書は、前述した点をふまえたうえで、野生動物保護区やその他の国家の介入を経験し、主体的な交渉を経てつくり出された人々の行動を「地域住民による日常実践」と定義し、保護区に隣接して住む人々の営みや彼らの保護政策に対する声や行為を理解することの重要性に着目している。

本書は、筆者が野生動物保護の現場に飛び込み「地域に根ざした保全アプローチ」の必要性に気づくにいたる経緯を紹介するところからはじまっている。第1章では、19世紀後半から現代までのアフリカにおける野生動物保護政策の変遷とともに、「地域に根ざした保全アプローチ」が台頭してきた過程を概観している。第2章では、「野生動物管理」や「持続可能性」、「順応的管理」などをキーワードとしたアフリカにおける野生動物保護に関する先行研究における議論の問題点を指摘し、保護区周辺に住む人々の実践に注目するという本書のアプローチについてまとめている。第3章で、エチオピアにおける野生動物保護について概観したのち、第4章では、センケレ・サンクチュアリの事例をもとに、国家による土地の囲い込みによる地域社会への影響についてあきらかにしている。第5章では、マゴ国立公園において、鳥獣がもたらす農作物被害に対する人々の対応について詳細な記録をおこなっている。第6章では、マゴ国立公園において住民が結成した密猟監視のための自警団が結成された社会的背景や、この地域の野生動物保護活動への影響についてまとめている。

終章では、それぞれの事例における「地域住民による日常実践」を比較・分析し、当局者に対する抵抗だけでなく協力姿勢をみせる住民の柔軟な「日常実践」に対して、「地域に根ざした保全アプローチ」に発展する可能性を見いだしている。

日本のアフリカ研究では、たとえば農村開発などをあつかった研究にくらべて、野生動物保護に関する研究はまだ数が少ない。また、環境破壊がすすむ地域に暮らす人びとの対応の仕方や、環境保護の言説に対応しながら日常をいきる人々の姿に注目した環境社会学の分野においても、野生動物保護をテーマにした研究は少なく、そのなかでもアフリカをフィールドとしたものはきわめて希有である。これらの点において、本書は先駆的であるだけでなく、「住民の論理」に着目して野生動物保護をとらえなおそうとした点においても、関連する分野に新たな展開や視座を提供したといえるだろう。本書は、野生動物保護にかかわる研究に関心をもつ人ばかりではなく、アフリカに関心をよせる人、さらには「地域住民による日常実践」に注目してフィールドワークにこれから取りくもうとする人たちにとって参考になる点が多々あると考える。

(安田章人／京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)